

NARUTO～影の英雄～

ほにゃー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

忍五大国の一つ、火の国は木ノ葉隠れの里に、強大な力を持った尾獣、九尾が襲来した。

九尾はその強靱なまでの力を使い、木ノ葉の里を襲い壊滅しようとしていた。木ノ葉の忍たちは、里を守る為、命をかけ、九尾に戦いを挑んだ。

多くの犠牲者を出しながらも、当時の里長である四代目火影によつて、四代目自らの命を犠牲にし、九尾を封印させることに成功した。

そして、四代目火影“波風ミナト”は英雄として語られ続けられた。

だが、英雄は一人ではなかった。

その者たちは表舞台で決して語られることの無い存在だった。

しかし、里思う気持ちは誰よりも強かった。

里の為にその命を犠牲にし、戦い続けた忍。

その名は、咲良一族。

目次

卒業試験	1
卒業おめでとう	11
担当上忍	28

卒業試験

忍五大国の一つ、火の国は木ノ葉隠れの里に、強大な力を持った尾獣、九尾が襲来した。

九尾はその強靱なまでの力を使い、木ノ葉の里を襲い壊滅しようとしていた。

木ノ葉の忍たちは、里を守る為、命をかけ、九尾に戦いを挑んだ。

多くの犠牲者を出しながらも、当時の里長である四代目火影によって、四代目自らの命を犠牲にし、九尾を封印させることに成功した。

そして、四代目火影「波風ミナト」は英雄として語られ続けられた。

だが、英雄は一人ではなかった。

その者たちは表舞台で決して語られることの無い存在だった。

しかし、里思う気持ちは誰よりも強かった。

里の為にその命を犠牲にし、戦い続けた忍。

その名は、咲良一族。

九尾襲来より十二年の月日が流れた。
あるアパートの一室。

そこに一人、ある少年が暮らしていた。

少年の名は咲良マナト。

咲良一族最後の少年だ。

「ふあ〜……良く寝た」

ベッドの上で欠伸をしながら、マナトは窓から差し込む陽の光を見つめる。

「良い天気だな。絶好の卒業試験日だ」

マナトは忍者学校アカデミーに通う生徒で、今日、忍者学校アカデミーの卒業試験を受けることになってる。

「早く準備して登校するか」

そして、マナトは時間を確認するために部屋の時計を確認する。

時刻は午前九時半。

試験は午前十時から開始。

「……………遅刻だ！」

マナトは素早く着替えを済ませると慌てて、家を飛び出した。

「よお、マナト！急いでどうしたんだ？」

「おっちゃん！おはよう！寝坊したんだよ！」

「いつも通りか！ほらよ、まだ朝食ってないんだろ？この林檍食いな」

行きつけの八百屋のおっちゃんから林檍が投げ渡される。

だが、おっちゃんの前腕がノーコンな為、林檎はマナトの目の前に落ちる。

地面に落ちる瞬間、マナトは足を伸ばし林檎を軽く蹴り上げ、口で林檎をキャッチする。

「おっちゃん、サンキューな！」

おっちゃんに礼を言い、マナトは忍アカデミー者学校を目指した。

「ギリギリセーフ！」

「遅刻だ！馬鹿もん！」

教室に入るなり、マナトは教師である海野イルカに叱られる。

「早く席に着け。これから試験内容について説明する」

イルカに怒られながら、マナトはすみませんと薄っぺらく謝罪して席に座る。

「マナトまた遅刻？」

「マナト、おはよー」

マナトに挨拶をしたのは志摩ライカとうちはカナデの二人だった。

マナトは九尾襲来の際に両親が亡くなり、今は祖父母と暮らしている。

そして、カナデは名門であるうちは一族の子であるが、うちは一族はある事件で一族は殺され、今いるうちはの者はカナデを含め二人しかいない。

「二人ともおはよう。間に合って良かったぜ」

「全然間に合っていないからね」

「遅刻はいけないよ、マナト」

「はいはい、次は気を付けるよ」

「では、試験内容を発表する。試験内容は分身の術。名前を呼ばれた者は一人ずつ隣の教室に来る様に」

イルカはそう言い、最初の生徒の名前を呼んで教室を出る。

「分身の術か」

「不安なのか？」

「いや、俺じゃなくてナルトがな」

タイトはそう言い、教室の後ろ席に居るナルトの方を見る。

ナルトとは三人の共通の友達で、この忍者学校アカデミーでは落ちこぼれと呼ばれている生徒だ。

だが、三人はそんなこと関係なしに、ナルトのことを気に入れており、四人は仲が良
い。

「そう言えば、ナルトって分身の術苦手だったわね」

「うん、大丈夫なのかな？」

「確か三回目だったな。よし、ちょっと喝入れて来る」

「あ、じゃあ私も」

「私も」

マナト達が席に立つと、ナルトに近づく。

「ナルト。気分はどうだ？」

「マナト、それにライカにカナデ……俺ってば、今年も駄目かもしれねえってばよ……」

「しゃつきとしろよ、ナルト。いつもの元気はどうした？」

「でもよお……」

「火影になるでしょ？ だったら、こんな所で躓いてる場合じゃないよ」

「……そうだな！ 俺ってば、火影になるんだから、こんな所で躓いてる暇はねえってばよ

！」

「次！ うずまきナルト！」

「ほら、お前の番だ。行って来い」

「おうよ！」

ナルトは元気になり、教室を飛び出していく。

「一発で元気になったな」

「あれでこそ、ナルトよ」

「後はナルト次第だね」

「次！咲良マナト！」

そして、マナトの名前は呼ばれた。

「じゃ、行つてくるかな」

「頑張つてね、マナト！」

「マナトなら受かるよ！」

「おう！」

隣の教室に向かったマナトは試験担当であるイルカとミズキの前に立ち、印を組む。

「分身の術！」

ポウンツ！と言う音と共に、煙が起き、煙の中からマナトが三人現れる。

「よし！咲良マナト！合格！」

マナトは一発で試験合格し、卒業の証である額当てを貰った。

「俺たち三人、見事に合格したな」

「これで私たちも下忍ね」

「そうだね。でも……………」

カナデは気まずそうに言う。

何故ならナルトは試験に落ちてしまったからだ。

ナルトに何と言って声を掛ければいいのか分からず、三人は遠くからナルトを見つめていた。

結局ナルトは何も言わずそのまま去っていった。

「今の俺たちが慰めても哀れみにしか聞こえないよな」

「こういうのは時間が解決するのを待つしかないわ」

「なんか悪い気がするね……………」

「……………ま、俺たちは今度から担当上忍と一緒に三人組で行動するんだ。聞いた話だと、班編成は忍者学校側で決められるらしいから、俺たちが一緒の班になる可能性は低いだろうがな」

マナトは額当てを鞆にしまい言う。

「うう〜……………知らない人と一緒だったらどうしよう……………」

カナデは情けない声を出し、蹲る。

「まだ私とマナト、それにナルト以外の人と話せないの？せめて、同じ一族のサスケとぐらい話せるようになりなさいよ」

「そうは言ってもサスケとはもう随分話してないし、今更何を話したらいいのか……………二人と一緒にの班だったらいいのに……………」

「ま、一緒の班になれることを祈ろうぜ」

マナトは落ち込むカナデを慰めながらそう言う。

「じゃ、また来週な！」

「ええ」

「バイバイ」

三人は手を振り、そして、それぞれの家に帰って行った。

ライカは祖父母と暮らしてる家に、カナデは忍者学校アカデミーからおよそ十分の所にあるアパートに、そして、マナトも忍者学校アカデミー約三十分の所にあるアパートに。

「ただいまー」

「おお、マナト。お帰り」

マナトが家に帰ると台所からマナトの叔父の咲良シンキが顔を出す。

「叔父さん!? 明日まで任務だったんじゃない? ……」

「今日卒業試験だろ? そんな日に任務なんかしてられるか。速攻で終わらせて帰って来た。で、どうだった?」

「もちろん受かった!」

「流石だな! じゃ、合格祝いに美味しいもんでも食いに行くか」

「おう!」

卒業おめでとう

その日の夜、合格祝いと言う事で里でそこそこ値の張る居酒屋で晩飯を食べたマナトは家に帰るなり、そのまま眠りについた。

そして、物音で目が覚めた。

玄関でシンキが誰かと話しており、ベッドから起き上がる。

今につながる扉を開けると、シンキはベストを着用し、額当てを付けていた。

「マナト！目が覚めたのか……すまないな」

「叔父さん、どっか行くの？」

「ああ、呼び出しでな。ちよつと行ってくる。もう一度寝てろ」

シンキはそう言い、玄関を出て行く。

「こんな夜中に何処に行くんだ？……それに、叔父さん、呼び出して言ってた」

シンキはマナトに言えない用事がある時は決まって、呼び出しだと言って家を空ける癖があった。

そのため、マナトは何かあると考え、貰ったばかりの額当てを付け、シンキの後を追った。

シンキを追い掛けると、そこにはシンキ以外に里の中忍や上忍などが幾人か集まっていた。

「火影様！今度はばかりはイタズラじゃすみませんよ！」

「封印の書は初代様が封印された危険なモノ！」

「もし里の外に持ち出されたら！」

「うむ。封印の書は使い方によつては恐ろしいことになりかねん。盗まれて半日以上が経つておる。急いでナルトを探すのじゃ！」

三代目火影「ヒルゼン」の命により、忍達は一斉に散開する。

「ナルトのバカ……何やつてんだよ。大人たちより早く探さないと！」

マナトは封印の書がどんな物なのか分からなかったが、封印と付いてる以上、危険な物だと理解した。

「流石に、街や家には逃げないよな。となると……森か！」

マナトは森へと進路を向け、走り出す。

すると森の中で何者かの移動の痕跡を見つけ、マナトはそれを付ける。

そして、森の中に一軒家の傍でナルトが一人で何かをしているのを見つけた。

「ナルト！」

「ん？あ！マナト！」

「お前なにやってんだ！火影様や里の大人たちはカンカンだぞ！」

「で、でもさ……………」

「こらー！ナルトー！」

ナルトが何か言い訳をしようとしたその瞬間、イルカが現れ、ナルトを叱った。

「い、イルカ先生！」

「しまった！見つかった……………」

「マナト!?お前、なんでここに!?!」

「その…………火影様たちの話を盗み聞きして…………それで、ナルトが他の大人に見つかって怒られる前に、火影様に謝りに行かせよう……………」

マナトはナルトの方を見ながら言う。

「まったく……………とにかくナルト！その巻物を渡すんだ！帰るぞ」

「ちえー……………まだ術一個しか覚えれてねーのに」

「術？まさか、お前、術の訓練してたのか？」

「おう！」

その言葉にイルカはナルトの姿がボロボロなのに気付いた。

(ナルトの奴……………こんなにボロボロになるまで……………)

「覚えた術ってその巻物に書いてる術なんだよな？一体誰からそんなこと聞いたんだよ

？」

「ミズキ先生だつてばよ！この巻物の術見せれば、卒業間違ひなつて！」

「ミズキが………？」

イルカは不審に思った。

何故なら、イルカにナルトが封印の書を盗んだと言う事を伝えたのは忍アカデミー者学校の教師であり、同僚であり、友であるミズキだからだ。

そのミズキがナルトに封印の書の事を教えた。

しかも、卒業できると言つて。

その瞬間、イルカは背後に殺気を感じ、慌ててマナトとナルトを尽き飛ばす。

その直後、イルカをクナイが襲い、イルカは手傷を負つた。

「イルカ先生!？」

「よく……が分かつたな。それに……余計な奴もいるが、まあいい」

クナイを投げたのはミズキだった。

ミズキは木の上でイルカを見下す様に見ている。

「なるほど………そういうことが！」

イルカは全てを理解し、苦しそうに体に刺さつたクナイを抜く。

「ナルト………巻物を寄越せ」

「ナルト！死んでも巻物を渡すな！」

イルカとミズキの両方からの言葉にナルトは狼狽え、尋ねる。

「あのさ！あのさ！どーなってんの!？」

「ナルト！封印の書は、禁じ手の忍術を記して封印した危険な物だ！ミズキはそれを手に入れるために、お前を利用したんだ！」

イルカの言葉に、ナルトは構える。

そして、マナトもナルトの隣で構える。

「ナルト、その巻物はお前がもっていても意味が無いのだ。本当の事を教えてやるよ」
「ば、バカよせ！」

「十二年前、バケ狐を封印した事件はしってるな。マナト、お前も知ってるだろ？」
ミズキの言葉にマナトは無言で頷く。

「あの事件以来、里では徹底したあるおきてが作られた。しかし、ナルト。お前には決して知らされることの無い掟だ」

「俺だけ!?!何なんだ、その掟ってばよ!!」

「それはな……………」

「言うな！ミズキ！」

「ナルトの正体が、そのバケ狐だと口にしない掟だ」

「……………え？」

「つまり、お前がイルカの両親を殺し！里を壊滅させた九尾の妖狐なんだよ！お前は、憧れの火影にそのバケ狐を封印された揚句、里の皆にずっと騙されてたんだよ！おかしいと思わなかったか？あんなに毛嫌いされて！イルカも本当はな！お前が憎いんだよ！」
そう言つてミズキは背中に背負つた巨大な手裏剣をナルトに投げつける。

「ナルト！」

マナトは咄嗟にナルトを庇おうとするが、手裏剣の攻撃の方が早かつた。

手裏剣がナルトに刺さる。

そう思つた瞬間、イルカがナルトを押し倒し庇つた。

手裏剣はイルカの背に刺さり、ナルトには刺さらなかった。

「な……………なんで……………？」

「…………ナルト。俺もお前と同じだ。両親が死んで、誰も俺を褒めも怒りも認めもしてくる人がいなくて寂しくてよ……………クラスでよくバカやつた。人の気を引きたかつたんだ……………優秀な方で気を引けなかつたかわよ。ずっと……………ずっと、バカやつてたんだ……………苦しかった……………そうだよなあ、ナルト……………寂しかったんだよ……………苦しかったんだよ……………」

イルカはナルトを庇つたまま涙を流し、その涙がナルトの頬を濡らす。

「ごめんな……ナルト。俺がもつとしつかりしてりや……こんな思いさせずにすんだのによ………」

泣きながらナルトに謝るイルカ。

ナルトは何も言わず、巻物を手に走り出した。

「残念だが、ナルトは心変わりする奴じゃねえ……あの巻物を利用してこの里に復讐する気だ……さっきの目、見ただろ？アレは復讐に取り憑かれた妖狐の目だ！」

「……ナルトは……そんな奴じゃ……ない！」

イルカは背中に刺さった手裏剣を抜き、ミズキに投げる。

「マナト！ナルトを追え！」

「で、でも、イルカ先生怪我が………！」

「ナルトはお前の友達なんだろ！頼む！ナルトを一人にしないでやってくれ………！」

イルカの声を聞き、マナトは一瞬ためらうも、力強く頷き、ナルトを追った。

ナルトを追い掛けて数分。

マナトはナルトが木を背に座り込んでるのを見つけた。

「ナルト！ここにいたのか！早く逃げるぞ！」

マナトはナルトの手を取って走り出そうとするが、ナルトはその手を弾く。

「な……ナルト………？」

「どうせ……どうせマナトも、俺の事をバケ狐だと思ってるんだろ」

「……ナルト」

「マナト言つてたよな！自分の父ちゃんと母ちゃんは、九尾と戦って死んだって！俺が……俺が、その九尾なんだってばよ！どうせマナトも……俺のこと恨んでるんだろ！」

その瞬間、マナトはナルトを思いっきり殴りつけた。

「いい加減にしろよ……確かに、あんな話聞いたら恨むのが普通かもしれないねえ。でもな……あんな話位でお前を恨むほど、お前との付き合いは短くねえぞ」

マナトはナルトの目を見てそう言う。

「俺の事、信じる」

「あ……ま、マナ——」

ナルトが何か言い掛けたその瞬間、近くに誰かが落ちた。

それはイルカとナルトだった。

「そ、そんな……どうしてだ……ナルト……どうして俺がイルカじゃないと分かった」

「イルカは……俺だ」

イルカはミズキで、ナルトはイルカの変化だった。

「なるほど……親の仇に化けてまでアイツを庇って何になる？」

「お前みたいなバカ野郎に巻物は渡さない」

「バカはお前だ。ナルトも俺と同じなんだよ」

「同じ？」

「あの巻物の術を使えば、何だっと思いのままだ。あのバケ狐が力を利用しない訳がない。あいつはお前が思っているような「ああ！」

イルカはミズキの言葉を肯定した。

その瞬間、ナルトは俯き、悔しそうにする。

「バケ狐ならな」

「え？」

その言葉にナルトは思わず耳を疑った。

「けど、ナルトは違う。アイツは……俺が認めた優秀な生徒だ。努力家で、一途で、そのくせ不器用で誰からも認めてもらえなくて……あいつは人の心の苦しみを知っている。バケ狐じゃない。アイツは木ノ葉隠れの里の……うずまきナルトだ！」

イルカの言葉にナルトは涙を流していた。

「ナルト……分かっただろ。お前を認めてくれてる奴は確かにいる」

マナトは立ち上がり、ナルトに言う。

「里に逃げるんだ。そして、火影様にこの事を伝えて、援軍を呼んで来てくれ。頼むぞ」

そう言い、マナトはイルカとミズキの間に飛び出す。

「ま、マナト!？」

「なんだ、マナトか。ナルトは何処だ？」

「里に逃がした。きつと今に、上忍を連れてお前を捕まえに来るぞ」

「はっ！バケ狐の言葉に誰が耳を貸すかよ」

「黙れ。前から思ってたけど、俺、アンタみたいな教師が大ッ嫌いだったんだよ」

「ああ、そうかい。俺もお前みたいなクソ生意気なガキ……大ッ嫌いだぜ！」

そう言って、ミズキは背中にあるもう一つの巨大手裏剣を投げる。

マナトは素早くチャクラを練り、印を組み忍術を発動する。

「火遁・豪火球の術！」

口から巨大な火の玉をマナトは吐き出し、手裏剣は炎の威力と熱風に寄り速度が落ち、地面に刺さるように落ちる。

「豪火球の術だど!? 卒業したての下忍が使える術じゃないぞ!？」

「カナデに教わったんだよ。悪いけど、普通の下忍とは思うなよ」

「なるほど、うちはの小娘か。そこまでして、なんであのバケ狐を守る?」

「友達だからだ」

ミズキの質問にマナトは即答する。

「アイツはお前の両親を殺したバケ狐なんだぜ? 仇を討ちたいと思わないのかよ? 本当は恨んでるんじゃないかねえのか? 心の底から殺してやりたいってよ!」

「そんな訳あるかよ」

またしても即答するマナトに、ミズキは啞然とした。

「父さんと母さんを殺したのは九尾だ。ナルトじゃない。ナルトは馬鹿で、俺と一緒に遅刻するような奴で、イタズラ好きで、ラーメンが好物で、誰よりも努力をする奴で

………俺の友達だ。友達を見捨てるかよ！」

マナトはクナイを取り出し、ミズキに向かつて走り出す

「聞いてて反吐が出るぜ。これだから木ノ葉つてのは………虫唾が走るんだよ！」

ミズキに攻撃を仕掛けようとしたマナトは、一瞬で蹴り飛ばされた。

「がつ!？」

「死ねよ!ガキが!」

豪火球の術に驚かされたとはいえ、ミズキは中忍。

さらに、忍者学校アカデミー入学前から独学で、傀儡や幻術など習得していたオールラウンドで

あり、木ノ葉の秀才と呼ばれ、一時期は上忍昇格の話も合った忍だ。

下忍のマナトなど相手ではなかった。

あっさり形勢逆転となり、マナトは倒される。

「マナト!」

イルカは足元に倒れたマナトに呼び掛けるも、マナトは痛みで動けなかった。

「イルカ……お前を後にするつつたがやめた………ガキと一緒にさっさと死ね!」

地面に刺さった手裏剣を抜き、イルカとマナト目掛けミズキは投げる。

イルカはマナトを抱きしめ、守る様に庇う。

だが、手裏剣は二人には届かなかつた。

何故なら、ミズキが手裏剣を投げる瞬間、ナルトがミズキに飛び蹴りを食らわせ、手裏剣は大きく上に逸れたからだ。

「ナルト!？」

「イルカ先生と、マナトに手エ出すな……殺すぞ」

ナルトは自身の身長半分ぐらいの大きさの封印の書を地面に置き、ミズキを睨みつける。

「バ、バカ!なんで来た!?!逃げろ!」

「ほごくな!テメエーみたいながキ、そのクソ生意気ながキ同様、一発で殴り殺してやるよー!」

「やってみろ、カス。千倍にして返してやっから」
そう言い、ナルトは印を組む。

「多重影分身の術！」

その瞬間、ミズキの周囲には千人近いナルトの実体を持った分身、影分身が現れた。

「な、なんだと!?!」

「どうしたよ?」

「来いってばよ」

「俺を一発で殴り殺すんだろ?」

「来ないなら……」

「こっちから行くぜ!」

「うぎやああああああああああああああああ!!?!」

それから数分間、森の中では殴り蹴る音と男の悲鳴が鳴り止まなかった。

いくら上忍並みの力を持った中忍と言えども、数で押されれば一溜りも無かった。

ミズキはボロボロになり意識を失って地面に倒れていた。

「イルカ先生……あれは……」

マナトが腹部を抑えながらイルカに尋ねる。

「……あれは影分身……実体を持った分身で、分身の術よりも高度な忍術だ……ナル

トの奴……それを半日で覚えるとは……………」

「ちとやり過ぎちゃった……………」

ナルトはボロボロになったミズキを見つめ、笑う。

「……………ナルト。ちよつとこっちに來い。お前に渡したいものがある」

ナルトはイルカの言葉に素直に従い、近寄る。

「目を閉じろ」

目を閉じたナルトを見て、イルカはあることをし始めた。

「先生……………まだ？」

「よし！もう開けていいぞ」

ナルトが目を開けて最初に見たのは嬉しそうな顔をしてるマナトと、額当てをしていないイルカだった。

そして、イルカの手には自分が額に付けていたゴーグルがあった。

その時、自身の額にゴーグルとは違う、別の重みを感じた。

「ナルト……………卒業おめでとう」

ナルトの額にはイルカの額当てがあった。

「やったなナルト！」

マナトは喜びに声を上げる。

「卒業祝いに、一樂のラーメン奢ってやる！マナト、お前も一緒に奢るぞ！」

イルカの言葉はもうナルトの耳に入っていないかった。

ナルトは喜びに涙し、イルカに抱き付いた。

その光景にマナトも嬉しくなり、二人に抱き付いた。

（忍にとつて本当に大変なのはこれからだ！つて説教するつもりだったが………ま！それはラーメン屋まで我慢しといてやるか）

担当上忍

「そう言えば、マナト。聞いた？ミズキ先生、先生止めたんだって」

説明会の日、マナトはライカと一緒に学校へと向かっていた。

その途中、ライカはマナトにミズキの話をした。

「へー。そうなんだ」

「なんでも一身上の都合だって。しかも忍者も止めたそうよ」

前回の事件の後、ヒルゼンにマナトとナルトとイルカの三人でミズキの事を報告した後、今回の一件は他言無用と言う事になり、そして、ナルトは特例として卒業を認められた。

ミズキを捕まえ、封印の書が他里に持ち込まれることも無く、そして、影分身の習得などの要因もあつたから特例が認められたのだ。

「マナト！ライカ！おはよー！」

二人で歩いてる所に、カナデも合流し、いつもの三人で学校に向かう

「私ね、決めたんだ」

「決めたって何を？」

「サスケと話してみる」

その言葉にマナトとライカは驚いた。

「いつまでも二人に頼るわけにはいかないし、それに、サスケともこのままじゃいけないと思うんだ。だから、話してみる。ううん、話す！」

「……………そっか。昔みたいに戻れると言いな」

「そうね。ま、従兄妹同士なんだから、話し合えば絶対に分かり合えるわよ」

「うん！」

いつもの三人でワイワイ叫びながら、教室に入った瞬間、三人が見たのはキス現場だった。

ただし、男同士の。

しかもしてるのは、ナルトと、カナデ以外のうちは一族の生き残り、うちはサスケだった。

「……………マナト、ライカ。……………やっぱ、サスケと話すのはもうちよつと後にしようと思う」

「……………そ、その方がいいかもね」

「……………朝から酷い物を見たな」

その後、サスケのファーストキスを奪ったことで、ナルトは女子から袋叩きにあつて

いた。

ここだけの話、サスケはかなりモテる。

サスケは名門のうちは一族の人間であり、成績優秀で顔も良く、そしてクールな感じが女子受けするのだった。

「しかし、相変わらずサスケはモテるな。女子つてああいうのがいいのか？」

「そうね。絶対につとは言えないけど、顔が良いのは一つの理由になるわね」

「そうだね。カッコいい人は殆どの人が好きだと思うよ」

「羨ましいね。俺もあんなイケメンに生まれたかったよ」

こうは言うが、マナトは別に本気でイケメンで生まれると思っていない。

イケメンにはイケメンが苦勞することがある。

その分、普通ならその苦勞することはしなくてすむ。

ただ単に、話の流れのノリで言ったに過ぎなかった。

「わ、私はイケメンなんて言う高嶺の存在より、身近な人がいいけど……その、マナトみたいなの……」

「わ、私も顔より性格の相性がいい人が……マナトみたいな……」

二人は最後の方だけぼそぼそと言う。

二人はマナトに恋しており、マナトは気付いていない。

そして、ライカとカナデの二人は互いの好きな人が同一人物であることも理解した上で、良き関係を築いている。

「ん？最後なんか言ったか？」

「なんにも」

ハモリながら言う二人に、マナトは首を傾げつつ、時間が過ぎるのを待つ。

数分後、イルカが教室に入って来て、全員が着席してるのを確認し、話を始める。

イルカの怪我は運よく急所を外れており、数日で回復していた。

「今日から君たちはめでたく一人前の忍者になった訳だが、まだ新米の下忍。本当に大変なのはこれからだ。今後君たちは三人一組スリーマンセルの班を作り、担当上忍のと共に、様々な任務をこなしていくことになる。班は力のバランスが均等になる様にこつちで決めた。

まず第一班！」

イルカは次々と班のメンバーを読み上げて行き、第七班のメンバーを読み上げる。

「第七班！うずまきナルト！春野サクラ！」

「やったー！」

ナルトはサクラと一緒に班になれたことに喜び声を上げる。

反対に、サクラは落ち込んでいた。

「そして、うちはサスケ！」

「やったー！」

今度はサクラがサスケと一緒にの事に喜び、ナルトはサスケも一緒にの事に落ち込んでいた。

「ちよつと待つてくれればよ、イルカ先生！どうして俺がサスケなんかと一緒になんだってばよ！」

「サスケはトップの成績で卒業。そして、ナルト……お前はドベ！」

その言葉に、周りが笑い出す。

「班のバランスを均等にするとこうなるんだよ」

「精々俺の足を引っ張るなよ、ドベ」

「なんだと!？」

「ナルト！座れ！」

イルカに言われ、ナルトは渋々席に座る。

「続いて第八班！」

第八班は日向ヒナタ、犬塚キバ、油女シノの索力に優れた能力を持つ感知タイプのチームとなった。

「第九班！咲良マナト！志摩ライカ！うちはカナデ！」

三人の名前が呼ばれたことにカナデは嬉しくなり思わず涙を流した。

最後の第十班は奈良シカマル、山中いの、秋道チョウジとなり、午後は担当上忍を紹介すると言う事を伝えられ、それまで解散となった。

「マナト！ライカ！一緒に班だよ！良かったよお〜！」

「まったくもう。そんなことで一々泣かないの」

「だって！だって！」

「分かったから。俺も二人と一緒に班で嬉しいしよ」

「そ……そうね。私も二人と一緒に良かったわよ」

マナトがそう言うと、ライカは照れくさそうにそう言う。

「それより、午後までまだ時間があるし、昼飯にしよう」

マナトの提案に、二人は頷き、持参してきた弁当を持ち寄って忍者学校アカデミーの中庭で食べることになった。

「マナトのお弁当って本当にいつもおいしいそうよね」

ライカはお弁当のきんぴらごぼうを食べながら言う。

「そうか？どれも普通の味だぞ？」

マナトはそれに返事をしながら卵焼きを食べる。

「でも、マナトのお弁当って本当に美味しそうだね。ねえ、私のから揚げと交換しない？」

「いいぞ。じゃ、このパセリやるよ」

「から揚げとの交換食材にあつてないよ!？」

「冗談だつて。ほら、生姜焼き」

「マナト。私にも頂戴。はい、ハンバーグ」

「おう、いいぞ」

互いにおかずを交換し合いながら、楽しい昼食時間を過ごしていた。

なお、マナトのお弁当が予想以上に美味しく、二人は女として負けたと思うと同時に、また食べたいとも思った。

午後になり、担当上忍の紹介で、殆どの班は担当上忍と共に出て行つたが、マナト達「第九班」とナルト達「第七班」の担当上忍はまだ来ておらず、教室で待つていた。

暇になってマナトとライカ、カナデの三人はしりとりをして時間を潰してた。すると、廊下から足音が聞こえ、全員が注目する。

現れたのは木ノ葉ベストを着て、額当てを額に付け、右目に眼帯の付いた身長は二メートルはあると思われる男だった。

「悪い悪い！ちよつと道に迷つちまつた。俺が第九班の担当上忍だ。第九班、全員いるか？」

「はい、います」

その言葉に、マナトは立ち上がって言う。

「よしーじゃあ、第九班集体。外に出るぞ」

マナト達は担当上忍の後を追い外に出る。

着いたのは先程昼食を食べた中庭だった。

担当上忍はマナト達を地面に座らせると、自分も地面に座る。

「まずは自己紹介からだな。俺は有馬トウマだ。年齢は30歳。好きな物は風呂上りのコーヒー牛乳だ。嫌いなものはコーヒー牛乳が置いてない銭湯。趣味は……特になし

だな。面白いのがあったら教えてくれ。ちなみに将来の夢は無事に引退して毎日温泉に浸かることだ」

トウマはそう言つて笑う。

「じゃ、次はお前らだ。左から順に言つてつてくれ」

「志摩ライカです。好きな物はゆで卵。嫌いなものはひじき。趣味は釣りです。将来は父さんと母さんの分まで長生きして皆を守るくノ一になることです」

「う、うちはカナデです。好きな物は辛い物で、嫌いな物は酸っぱい物です。趣味は家庭菜園で、将来の夢は姉の様なくノ一になる事です」

「咲良マナト。好きな物はヨーグルト。嫌いな物は梅干し。趣味は父さんの形見の忍具の手入れ。将来の夢は、叔父の様な忍になることです」

「(うちはの生き残りとして、志摩一族の子、そして、あの咲良一族……なんで俺にこういう連中を押し付けるのかね、火影様は……)お前らの事はよく分かった。取り敢えず、明日はサバイバル演習を行う」

「サバイバル演習?」

「それなら忍者学校で散々やつたけど……」

「なんで今更また……」

「ただの演習じゃない。これはお前達の本当の卒業試験だ」

「「はっ?」」

トウマの言葉に、思わず三人は聞き返した。

「^{アカデミ}忍者学校の卒業試験の合格者三十名中下忍になれるのは十二名。残り十八名は^{アカデミ}忍者学校に戻される」

「じゃ、じゃあ、あの卒業試験は……………」

「下忍になれる可能性のある者を選別する試験だ。この演習は脱落率66%の超難関テストだ。取り敢えず、明日朝十時に演習場に集合。朝飯はしっかり食って来いな。ただし、演習で吐かない程度に。忍具も忘れるな。じゃ、解散」